母性意識の程度とその形成要因

～ＶＡＳ調査用紙に基づいて～

三瓶まり・前田隆子・福井典子*

Mari SAMPEI, Takako MAEDA and Michiko FUKUI

A study on the maternal instinct in children and factors controlling the process of creating it

近年における社会の著しい変化は母性意識のあり方に大きな変容をもたらしている。母性意識が低くなっているようなのである[1]。平成元年の日本における合計特殊出生率は1.57人と低く、社会問題にもなったが、その主な原因としては女性の未婚率および少産傾向の上昇が挙げられている。これらの社会的背景には少子化や核家族化が加速した結果、幼い子どもと触れ合う機会が減少し、子どもに対する関心が薄れたことや、女性の社会進出によってライフスタイルが多様化し、結婚して子どもを育てるという従来型の役割のみを選択するだけでなく、職業人としての役割を重視する傾向が強くなったことなどが考えられる。

母性意識の本質は子どもの立場になって子どもを思いやる心にある。その意識は本能的に備わっているものではなく、女性の成長過程における様々な環境が影響を及ぼしながら、形成され、発達していく後天的なものである。影響要因のなかでも、斎藤ら[2]は幼少期からの女性自身の母親との間の温かい人間関係および子どもとの接触経験の重要性を指摘している。

したがって、今回は、母親となる資格をもつ医療技術系女子学生を対象に、彼女らが現在持っている母性意識の程度を把握するとともに、幼い頃における母親との接触体験や、成長期における幼い子どもの世話などの体験を中心に、母性意識の形成過程との関連について検討した。

対象と方法

対象：鳥取大学医療技術短期大学部1995年度在籍中の未婚女子学生を調査対象とし、有効回答（回収率80.4％）277名分について検討した。その内訳は、看護学科学生188名、衛生技術学科学生89名であり、平均年齢は19.6歳であった。

看護学科、*鳥取大学医学部脳神経小児科学教室

方法：

１．次の事項について、アンケート調査を実施した。回答に含まれる主観的な内容を点数化するためには、Visual Analogue Scale（以下VASと略す）を用いて評価し（表１）、０～100点の範囲で具体化した。

①母性意識の内容（子どもといると楽しい、子どもが好き、子どもに関心があるなどの気持ちや、結婚を考える、母親のようになりたい、女性であることに対する気持ちなど）

②母性意識形成の影響要因として成長過程における母親や子どもとの関わり（幼少時の友達や幼い子どもとの遊びや世話、母子間の接触度）、母親に対するイメージおよび自己観

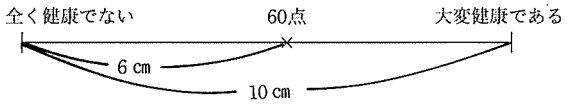
２．母性意識の程度と影響要因の関連性については、重回帰分析およびステップワイズ回帰分析した。

表１　アンケートの内容

質問項目
1. 学年
2. 所属学科
3. 子どもと一緒にいると楽しいですか。
4. 子どもが好きですか。
5. 子どもに関心がありますか。
6. 結婚を考えることがありますか。
7. 結婚をしたらすぐに子どもがほしいと思いますか。
8. 自分が母親になることを当然のことと思いますか。
9. あなた自身が女性であることを肯定しますか。
10. 将来、子どもをあつかう仕事につきたいと思いますか。
11. あなたは小学生の頃友達と遊ぶことが多かったですか。
12. これまでに幼い子どもの世話をしたことがありますか。
13. これまでに幼い子どもと遊んだことがありますか。
14. あなたのお母さんは心が温かい方ですか。
15. あなたはお母さんが好きですか。
16. お母さんのようなお母さんになりたいですか。
17. 子どもの頃お母さんと話しましたか。
18. 子どもの頃お母さんに抱っこや添い寝をしてもらった経験がありますか。
19. あなたは自分自身を心の温かいほうだと思いますか。
20. あなたは自分自身をわがままだと思いますか。

Visual Analogue Scale (VAS)

例）あなたの健康状態はどうですか？線上に　×印を付けてお答えください。



結果

1．母性意識の程度

母性意識の程度を示す８項目をみると、「結婚したらすぐ子どもがほしい」の53.96点、「子どもを扱う仕事につきたい」の48.09点を除く６項目で60点以上の得点を示していた。

母性意識の程度を示す「子どもといると楽しい」「子どもが好き」「子どもに関心がある」の「子ども肯定する気持ち」３項目の平均は65.09点、「結婚を考える」「結婚したらすぐ子どもが欲しい」「母親になるのは当然」「女性であることを肯定する」などの「女性性を肯定する気持ち」を示す４項目の平均は64.92点、「子どもを扱う仕事につきたい」という積極的に子ども受容する気持ち」の平均は48.09点であった（図１）。

2．母親や子どもとの関わりおよび自己観

母性意識に影響を与えると考えられる母親や子どもとの関わりおよび自己観の程度は、「母親との会話」や「母親が好き」の項目で80点を越えており、「自分を温かく思う」は53.70点、「幼い子どもの世話をした経験」は63.38点と低かった。「自分を温かく思う」に対応して「自分をわがままと思う」の得点は70.55点と高い。また母親との関わりでは、「母親は温かい」「母が好き」「母との会話」「抱っこや添い寝」の得点が高いのに対して「母親のようになりたい」の得点は低かった（図２）。

3．母性意識の学年別比較

母性意識を学年別に比較してみると、８項目すべてにおいて、１年生の平均得点が低かった。「子どもを肯定する気持ち」は２年生の得点で高く、「結婚したらすぐ子どもがほしい」の項目を除く「女性性を肯定する気持ち」は３年生が高かった（図３）。

4．母性意識の学科別比較

母性意識の８項目すべてにおいて看護学科学生の得点が高く、「結婚したら子どもがほしい」「母親になるのは当然」の２項目を除く６項目で有意差があった（図４）。

5．母性意識と影響要因との関係

1）「子どもを肯定する気持ち」について

「子どもといると楽しい」「子どもが好き」「子どもに関心がある」などの「子どもを肯定する気持ち」には、すべて「幼い子どもと遊んだ経験」と「母親を温かいと感じる気持ち」が影響している。一方、「小学

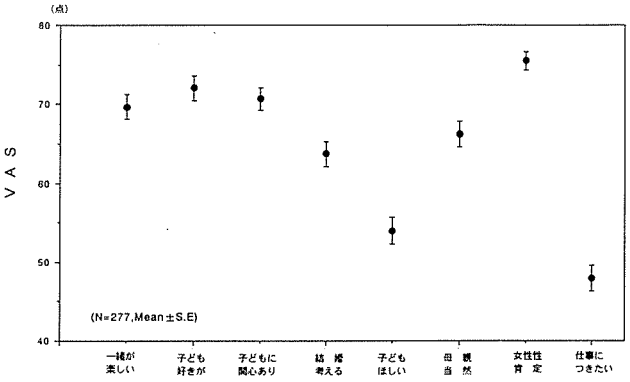


図１　母性意識の程度

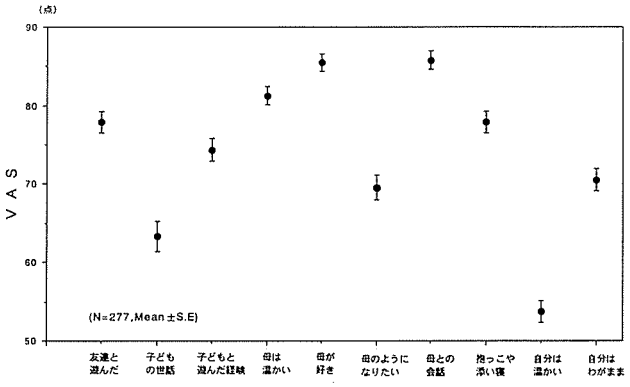


図２　母親や子どもとの体験の程度

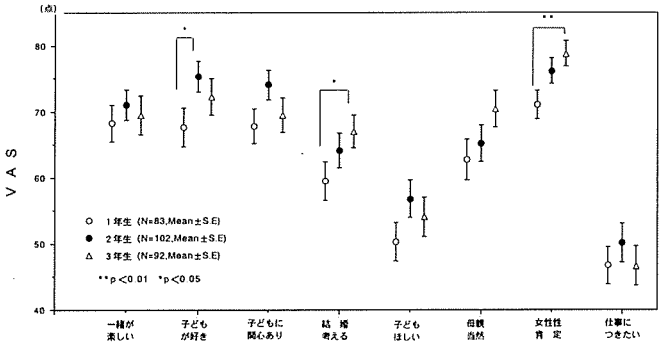


図３　学年別による母性意識の比較

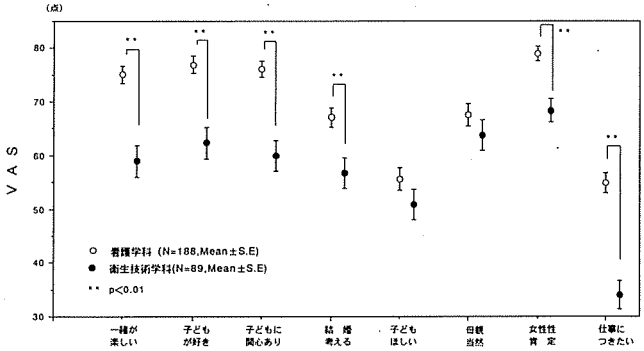


図４　学科別による母性意識の比較

生の時に友達と遊んだ経験」や「幼い子どもの世話をした経験」は関連がなかった（表２）。

２）「女性性を肯定する気持ち」について

「結婚を考える」「結婚したらすぐ子どもが欲しい」「母親になるのは当然」「女性であることを肯定する」などの「女性性を肯定する気持ち」には、「母親を温かいと感じる」「母親のようになりたい」「母親が好き」のような母親に対する肯定的な感情とともに、「小学生の頃の友達と遊んだ経験」や「幼い子どもと遊んだ経験」「幼い子どもの世話をした経験」などの子どもとの体験が影響していた。

反対に抱っこや添い寝などの母親とのスキンシップは関連が無かった（表３）。

表２　「子どもを肯定する気持ち」に対する影響要因

母性意識／影響因子	子どもといると楽しい	子どもが好き	子どもに関心がある	子どもをあつかう仕事につきたい
幼い子どもと遊んだ経験	0.136	0.178	0.155	0.119
母親を温かいと感じる気持ち	0.039	0.048	0.042	0.024
母親との会話の多さ				0.010
決定係数（R^2）の合計	0.175	0.226	0.197	0.154
有意差（P）	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001

表３　「女性性を肯定する気持ち」に対する影響要因

母性意識／影響因子	結婚を考える	結婚したらすぐ子どもがほしい	母親になるのは当然	女性であることを肯定する
母親を温かいと感じる気持ち	0.027		0.013	0.018
友達と遊んだ経験	0.015		0.012	0.036
母親のようになりたい		0.056	0.105	
幼い子どもと遊んだ経験			0.029	
母親が好き			0.020	
幼い子どもの世話		0.029		
決定係数（R^2の合計）	0.042	0.085	0.179	0.054
有意差（P）	0.011	0.0001	0.0001	0.002

㈱空欄はモデルに採用されなかったことを示す

表４　「積極的に子どもを受容する気持ち」に対する影響要因

母性意識／影響因子	子どもを扱う仕事につきたい
幼い子どもと遊んだ経験	0.119
母親を温かいと感じる気持ち	0.024
母親との会話の多さ	0.010
決定係数（R^2）の合計	0.154
有意差(P)	<0.0001

３）「積極的に子どもを受容する気持ち」について

「子どもを扱う仕事につきたい」という「積極的に子どもを受容する気持ち」には「幼い子どもと遊んだ経験」や「母親を温かいと感じる気持ち」が影響していた。この他に「母親との会話の多さ」も影響していた（表４）。

考　　察

１．母性意識の程度について

今回の調査では、母性意識の程度を把握するためにVASを用いてアンケート調査を行った。これは主観的なデータを客観的に点数に表して測定するものである。これまでの調査では、母性意識の程度を点数化して回答を求めたものは無い。この点から本研究では、アンケートの数値がそのまま母性意識の程度を表すため、対象者の母性意識の度合をより正確に把握できていると思われる。

母性意識の程度では、「結婚したらすぐ子どもがほしい」の53.96点、「子どもを扱う仕事につきたい」の47.93点の２項目を除く６項目で60点以上の得点を示しており、医療技術系女子学生の母性意識は決して低くないことを示している。しかし、母性意識を学年別にみてみると、「子どもを肯定する気持ち」では２年生が高い得点を示し、「女性性を肯定する気持ち」では３年生が高く、すべての項目で１年生の平均得点が低かった。また、学科別の母性意識では岩田ら[3]の報告と同様に、すべての項目で看護学科の学生が有意に高い得点を示していた。この結果から、医療技術系女子学生の母性意識は決して低くないけれども、対象者すべてが平均して高い母性意識を持っているのではなく、ある特定の集団によって母性意識の程度は質，量ともにかなり差があることが明らかになった。

この結果の背景には、①対象者が医療技術系の女子学生であるから60点以上の高い母性意識を示したのではないかということ②どのような医療技術職を選んだのかということが母性意識の程度に関係しているということが存在しているものと思われる。医療に興味をもち、それを進路に選択する学生は、人間というものに少なからず関心をもち、病いをもつ人間に対して援助したい、力になりたいと考えるやさしい心を持った人間が多い。さらに、看護婦は直接的に患者を援助するのであるから、より強い人間愛に富んだ人間であるとも考える。したがって、医療技術職を選んだ女子学

生は母性意識の程度も比較的高く、さらには患者に直接的な援助を行う看護婦になりたいと考える看護学科の学生は母性意識が高いという結果が出たのではないかと推測する。

さらに、この結果を妊婦の母性意識と比較してみると、斎藤ら[2]による妊婦の母性意識調査において、9割の妊婦が14点中10点以上の高い母性意識を示していることから、妊婦との比較では医療技術系女子学生の母性意識はやや低い傾向にあることがわかる。これは、池田ら[4]が子どもに対する意識は未婚女性と子どものいる既婚女性とでは相違があると報告しているのと一致しており、妊娠・出産・育児が母性意識を急激に発達させる大きな影響因子になることを予測させている。

次に、母性意識形成に影響すると思われる母親および子どもとの関わりの結果をみて気づくことは①「自分は温かい人間である」の得点が1番低く、「わがままである」の得点が高いこと②母親との関わりにおいて「母親は温かい」「母が好き」「母親との会話」「抱っこや添い寝」の得点は高いのに対して「母親のようになりたい」の得点は低いことである。

この2つのことから、青年期にある医療技術系女子学生は、他者に対する思いやりの感情よりも自分はわがままな人間であると自己評価していること、また母親を好きだという肯定的な感情はもっているが、母親の生き方が自分の人生のモデルにはなっていないことがわかる。平井は[5]母性意識が形成されるもとは「思いやりのある心」であるといっており、その点から、今後検討が必要であると考えている。

今回の調査では「子どもを扱う仕事につきたい」の得点は低かったが、その理由は対象者の将来の職業が具体的に限定されているためと考えられる。

2．母性意識と影響因子との関係

「子どもを肯定する気持ち」と「積極的に子どもを受容する気持ち」には「幼い子どもと遊んだ経験」や「母親を温かいと感じる気持ち」が影響していた。子どもを肯定したり、受容したりする気持ちには子どもの世話ではなく、楽しく過ごした経験や母親を肯定する感情が強く影響しているといえる。子どもと楽しく過ごすことが重要であるという結果は、Lamb[6]が母親と父親の意識の違いについて、母親は世話をしたり、しつけたりする目的で子どもを抱くことが多いが、父親は遊ぶために抱くことが多いと言っているのと関連があるように思われる。つまり母性意識を形成するためには、世話という責任の伴う行動ではなく、子どもと楽しく過ごすことが大切なのである。また、母親との関わりという観点からいえば、会話や抱っこなどの母親に受容されたという経験を通して生まれる母親への肯定的な感情が母性意識を形成、発達させると推測できる。

一方、「女性性を肯定する気持ち」では「母親を温かいと感じる気持ち」「友達と遊んだ経験」「幼い子どもと遊んだ経験」などとともに「母親のようになりたい」「幼い子どもの世話」があがってくる。図2から分かるように「母親のようになりたい」「幼い子どもの世話」はその体験頻度が少ない。しかし、体験頻度が少ないにもかかわらず、影響因子として上位に上がってくることは注目すべきことである。「女性性を肯定する気持ち」には母親に対する肯定的な感情とともに、「子どもを肯定する気持ち」とは違って、幼い子どもの世話や遊んだ経験などの育児と同様の経験が重要であることが明らかになった。

母性意識の形成・発達を促すためには子どもとの接触や母親の温かい働きかけが重要である。今回の調査では、女子大生は母親に対しては概ね肯定的な受けとめ方をしていることが明らかとなったが、それに対して子どもとの関わり、とくに子どもの世話をした経験の少なさが目立っていた。母性意識の育つ段階では、子どもと遊んだり、世話をしたりなどの直接的に子どもと接触する機会をもつことが重要と考えられ、今後はその点からの検討が必要である。

要　約

青年期にある医療技術系女子学生277名を対象に、母性意識の程度および母性意識形成の影響因子と考えられる母親および子どもとの関わりとの関連性を調査し、次のような結果を得た。調査はVisual Analogue Scale（ＶＡＳ）を用いた質問紙を用いて、意識の程度を得点化し、重回帰分析およびステップワイズ回帰分析によって検討した。

1．医療技術系女子学生の母性意識の程度を表す平均得点は60点以上であった。

2．母性意識の程度を看護学科と衛生技術学科で比較すると、8項目すべてにおいて看護学科学生の得点が有意に高く、集団により母性意識の程度に差のあることが判明した。

3．「子どもを肯定する気持ち」と「積極的に子ども

を受容する気持ち」には、「幼い子どもと遊んだ経験」と「母親を温かいと感じる気持ち」が影響していた。

4．「子どもの世話」の得点が低いことから、子どもと接する機会が少ないことが明らかになり、今後対策を考える必要性が示唆された。

本研究に際し、ご指導頂きました鳥取大学医学部公衆衛生学教室大城等助教授、データ収集にご協力頂いた医療技術短期大学部看護学科19期生池田とも子様、兼本由美子様、鎌田條子様、長戸拓美様、福田正子様に深く感謝致します。

文　献

1）松本清一：助産婦の担う道，94，社団法人日本家族計画協会，1996
2）斎藤益子他：妊婦の母性意識とその形成に影響する因子，母性衛生，33（1）：64,1992
3）岩田銀子他,医療技術短期大学生に於ける母性意識の構造に関与する要因の検討，母性衛生3（2）：364，1995
4）女性の生活史研究会編（引用文例・池田政子担当）：いま女性は，p96，福村出版，1982
5）平井信義：母性愛の研究，p43，同文書院，1976
6）Lamb，M.E：2歳までのアタッチメント（愛着の）発達，父子関係の心理学，Pedersen,F,A（Ed.),p27－52，新曜社，1986

Summary

A questionnaire about the maternal instinct in children and the factors controlling the process in creating was given to 277 college girls studying in the Department of Medical Care Technology,Tottori University as a representative of young people. The questionnaire was developed using the VAS (visual analogue scale). We modified the results of the score and analyzed them by means of step-wise revolving analyses. The results are：

1. The average score was more than 60 points.
2. The scores of the students from the nursing department were clearly higher than those of the students from the department of medical technology for all 8 categories in the questionnaire.
3. The high scores on the questionnaire for the items "to support children" and "to accept children" seem to be influenced by "the experience of enjoying children" and "goodwill toward the mother".
4. The score for "care for children" was generally low. This suggests that the students did not have a chance to spend enough time with the children. We should think more seriously about this problem and try to solve it in the future.